令和元年版国土交通白書　インタビュー（NPO 法人 balloon）

千葉県柏市「ふうせん広場」（白書第１部第２章掲載）について、NPO 法人 balloon 代表の鈴木氏にお話を伺った。

令和元年版国土交通白書では「日本人の感性（美意識）を踏まえた変化」の都市緑化の事例として、市民の手により緑化などを図る動きがあることを述べています。まずは、NPO 法人 balloon（柏市から緑地保全・緑化推進法人として指定）が考える都市緑化とはどういうものでしょうか。

鈴木氏　：白書に掲載されました「ふうせん広場」では、都市部に増加する空き地を有効活用し、身近な緑を創出していくことに取り組んでいます。管理に困る空き地が増えてしまうことは地域にとってマイナスですが、住民がそこに手を加え、緑のパブリックスペースに転換できれば、こども達の遊び場や高齢者の休憩場所となり、地域にとってプラスの場所になります。日本はこれから人口減少していく中で、どうしても生じてしまう空き地を放置するのではなく、少し手を加えて使いこなしていくことが、縮小時代のまちづくりとして重要となるのではないかと思っています。白書には「日本人が本来持つ美意識」とありますが、本当に身近なところの緑を大切にして楽しむ文化が大事ではないでしょうか。週末に山や海に行って楽しむだけでなく、自分の庭で野菜を育てたり、身の回りのちょっとしたスペースに花を植えたりして楽しむようなライフスタイルが、広まっていくことが大事だと思います。

身近な緑を楽しむような取組みは、どのようにして広がっていったのでしょうか。

鈴木氏　：2010 年に柏市が「カシニワ制度」を創設しました。それは、空き地や里山等の管理に困っている土地所有者と、緑の活動をしたい市民団体をマッチングし、その活動を支援することで、身近な緑を増やしていく取組みです。2013 年度からは、国土交通省の「集約型都市形成のための計画的な緑地環境形成実証調査」に関する公募に柏市が採択され、「カシニワ制度」を用いてどう良好な市街地を生み出していけるか、検討を行

カシニワ情報バンクの仕組み

資料）柏市

いました。balloon はその調査の中で、業務委託を受けたり、事業実施のための協議会の事務局を務めたりしました。さらに、「カシニワ制度」を広めていくためのパンフレットを作成したり、カシニワの新たな使い方や管理方法の提案も行ったりました。現在では、約 40 団体が空き地や里山をフィールドに、緑の活動を行なっています。balloon としては南相馬市でも、空き地の利活用の取組みを進めています。避難指示が解除され、復興まちづくりが進められていく中で、まちなかに激増した空き地を、帰還した住民の皆さんと一緒に、菜園として整備しています。再開したカフェや食堂とも連携しながら、まちに賑わいをもたらすパブリックスペースを作っていければと思っています。

白書では、地域住民のためのイベント広場に空き地を利用している事例として「ふうせん広場」（柏市）を紹介しました。このように町の中の身近な緑が広がっていくためには、コミュニティとの連携が重要と思われますが、どのような活動をされたのでしょうか。

鈴木氏　:「ふうせん広場」では、地域のこどもたちと一緒に、空き地を遊び場として整備しています。月に 1 回活動日を設け、草刈りから、看板やベンチ作り、花壇や遊具作りまで、こどもたちのアイデアを基に、少しずつ整備してきました。こどもたちは参加費 300 円を持って、遊びに来てくれます。整備作業の後は、バーベキューをしたり、ピザを焼いたり、みんなでお昼ご飯を食べています。「ふうせん広場」は自治体が管理する公園ではないので、地権者の了承を得た上で、火を使った活動もしています。夏には毎年花火もしています。民有地ではありますが、地域のニーズを反映できる、より「パブリック」な空間を生み出せていると思います。最近では、近所の方が野菜を植えたり、苗木を寄付してくれたりと、「ふうせん広場」を使いこなしている姿も見られます。今は balloon で管理していますが、地域の大人とチームを組んで、より持続的な管理体制が築ければいいなと思っています。

ふうせん広場

資料）柏市

本日は、色々とお話をお聞かせ頂きましてありがとうございました。最後に、今後の国土交通行政に期待することなどありましたら、お聞かせください。

鈴木氏　：空き地に関して言えば、税金の仕組みを改めて考える必要があると思います。これからの時代、空き地を手放せずに土地を持っていること自体が大きな負担になってきてしまいます。南相馬市では災害当初、税制優遇措置がとられていましたが、徐々に解消されてきており、今後どう土地を維持・管理していくか、地権者が頭を悩ませている状況です。今までは土地を持っていることがプラスとされてきましたが、これからは逆にマイナスになってしまう地域は多いはずです。土地に対する意識を変えていく必要があると思いますし、行政にはそこを真剣に取り組んでもらいたいです。「カシニワ」では、所有者が空き地を地域に開き、地域住民が手を加えることで、管理負担をシェアしながら、コミュニティの場として活用しています。私が関わっている取り組みでは、空き地で始まったマルシェが発展し、店舗を構えた例もあります。空き地が地域の小さな活動やアクションの受け皿となり、それが展開していく中で、新たな地域の魅力を作っていく。目の前にある空き地を使いこなす、ステップアップに利用する、そんな姿勢が広がっていくと、まちづくりも面白くなってくるのではないかと思います

「令和元年版国土交通白書」http://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h30/index.html

インタビューにご協力いただきまして、ありがとうございました！

NPO 法人 balloon 代表
アーバン・デザイナー
鈴木　亮平　氏（写真）